

エドワード・シルヴェスター・モース(Morse)

彼が生まれたのは、1838年6月18日に、アメリカ北東部ニューイングランド地方のメイン州の古い港町、ポートランドであった。日本の天保9年にあたる。7人兄弟の3男で、4番目の子供であった。

エドワードの父親は、ビーバーや野牛などの毛皮を扱う毛皮商であった。彼は厳格なプロステタンで、科学には無関心であり、邪道であると考えていたようである。それに対して、母親は科学・博物学に興味を持って植物採集をしたり、さらには天文学にも興味をしめしていた。彼女がいなかったらエドワードは博物学への道は歩めなかったであろう。

彼が11歳のときに、彼の兄が病死したときに、牧師から洗礼を受けていないエドワードは、死後に地獄の業火に苦しめられると説教をされた。このことが彼にとって生涯消えない傷となり、宗教、キリスト教を強く批判を抱くようになった。さらには、厳格なプロテスタントの父親とも衝突するようになった。

彼の性格は、きかん気で、乱暴で、権威に反抗的で、学校に行くよりも野原にさまよっている方が好きだったようである。すぐかっとなるところもあり、典型的なやんちゃ坊主であつたらしい。小学校は退学させられているし、それから通った学校・学園等からも何度か放校処分を受けている。ハイスクールは卒業できず、もちろん大学も出ていない。学歴らしい学歴と言えば、後述するハーバード大学比較動物学博物館で学生助手として過ごした2年間だけである。身につけた種々の基礎知識の大半はまったく独学の賜物であった。

彼が16歳のときに、学校になじめないならば、父親は彼を就職させることとした。彼の兄が雇われていた設計業であるポートランド社に製図工に採用された。この会社はメイン中央鉄道と関係があり、機関車や諸機械の設計を行っていた。彼は子供のときから絵がうまかったのをそれを買われたのだ。でも、ここでも馴染めなかった。上役とも、たびたび衝突をしている。よく会社をさぼったが、首になることはなかったらしい。

しかしながら、ここで製図に従事した経験は彼の貴重な財産となった。貝をはじめとする動物の正確なスケッチは彼の特技になり、のちの研究報告の記録に十分活用できた。

少年時代

モースを動物学者への道を歩ませたきっかけは貝類の収集であった。16歳のころ、ポートランド社に勤めた頃は、かなりの貝コレクターであった。会社をさぼったのも、貝収集に出かけていたからであった。また、ニューイングランドの古い諸港は、遠洋漁業の拠点として栄えてきた。帰港してきた船員たちは土産品として異国で入手した珍しいきれいな貝殻を持ってきていた。ここからもいくつか彼は分けてもらったという。

その間、彼はポートランドの博物学会に入会した。ここには、当時、地質学、解剖学、植物学、動物

学等の博物学に第一流の専門家がつらなっていた。彼の才能を見抜いて引き立ててくれる人も出てきた。そこで大いに博物学への知識を吸収していった。その頃採取した貝のなかでいくつか新種の貝を発見した。また、そこで、神様同然と言えるような動物学者であるハーバード大学のアガシー博士に出会った。

彼はポートランド社は辞めていたが、木版業に職を見つけていた。さらには、工場機械、鉄橋、建物等のフリーの製図家として注文仕事をとって稼ぎ始めていた。

彼の貝コレクションはニューイングランド地方でかなり知られるようになっていった。そして、彼が21歳になろうとするときに、アガシー博士と会う機会があった。それも、先方が会いたがっているということであった。神様みたいな人が、無名の彼にである。そのうち、彼はアガシーの博物館での学生助手として契約をした。仕事は、博物館での標本整理と博士の研究を助けることである。館内で開催される教授たちの聴講する権利も認められた。月給は25ドルであった。彼はポートランドを離れて、ハーバードへ向かった。

亀石の音を聞くイワクラ学会メンバー

毎週のように日記を母親に送っていった。そのなかには、彼の作業内容が詳細に書きとめられていた。貝類を分類してそのシリーズを作成をしたり、顕微鏡の高度な使用法とスケッチをしたり、地球上の遠い場所から、珍しい標本が送られてくるときの、整理する楽しさ等である。

多くの有能な教授、学者等の人材にも出会えた。例えば、考古学者として有名なジェフェリー・ワイマン教授の講義を聴講したり、貝塚発掘に何度か同行したことが、後年の大森貝塚発見につながった。他にも、植物学者で著名な、また、ダーウィンと親交があったエーサ・グレーに接することもできた。その他、古生物学者、昆虫学者、魚類学者、多士済々であった。

青年時代

彼が、21歳になった頃、生物学を揺るがす大きな出来事が起こった。イギリスでダーインの『種の起源』が出版され、生物学革命の幕が切って落とされた。アガシー博士及びその弟子たちも、その論争に巻き込まれた。アメリカの学会では、ほとんどの学者がダーインの説を支持したが、アガシーだけはダーイン進化論を頭から認めなかった。カルヴィン派牧師の息子である彼には、聖書を否定することなどおよそ考えられなかった。彼の知的背景になっている整然とした静的な世界であり、偶然が支配し、すべてが変化する世界はあまりにも異質であった。でも、モースはアガシーを支持していたという。そのうちに、アガシー博士と弟子たちとの信頼関係が一瞬のうちに崩壊してしまった。そして、弟子たちは一斉にアガシーのもとを去って行った。モースも去って行った。

偶々、その当時、アガシーが首唱となった比較動物学博物館が、当地に開館することになった。モースは少年時代から陸貝と淡水産貝類を主体とした大コレクションを作っていたが、彼の所有物であるだが、それらをすべてこの博物館に移した。しかしながら、アガシーは、弟子たちの持ち込んだ標本類は博物館に帰属するものとみなした。長年にわたる収集品をすべて失うのは耐えられなかった。去って行くにあたり、返すよう懇願したが、かなえられなかった。

1862年、23歳のモースは、ケンブリッジを出て、母と妹の住むゴーラムの家に帰った。彼には定職はなく、貝の図版を作ったり、新聞、雑誌に博物学的記事を書いたり、有料の公開講義を始めた。作画の才能は優れていたらしい。講義では、最初のうちにはたいした収入はなかったが、話術にも長けており、彼の講義ののちには評判になり、年間5千ドルも稼げるようになった。

25歳の時に、エレン・エリザベス・オーエンと結婚をした。そして娘と息子の二人の子供が生まれた。

定職がなく、途方に暮れていたモースだが、大きな幸運がめぐってきた。それは、セーラムにあるビーボディ科学アカデミーの創設に参加することになった。1867年にアカデミーは発足して、モースは、軟体動物（貝やイカの仲間）・放射動物（現在のクラゲ類やウニ・ヒトデ類など）を担当することとなった。そこでは一般向けの挿絵入り普及博物学雑誌『アメリカン・ナチュラリスト』を創刊した。その創刊号の第1頁を飾ったのはモースの「ニューイングランドのカタツムリ」であった。

臨海実験とダーウィン進化説への支持

モースが35歳のときに、海岸に面した場所に臨海実験所の開設が行われた。というのは、教室で得た知識を、記憶にしまうだけではなくて、海の近くの実習で実際に学べれば、各自の教育に生かせるとの発想であった。動植物の臨界実験、地質学や海洋学等々の現地実習である。一時は、彼が離れていったアガシーも、この話に乗ってきた。不和になっていたモースも弟子たちも、再び教授と親密になっていった。学問を愛する者はまた、まとまっていった。モースも離反の原因となった貝類のコレクションの代金も受け取っていった。さらに、この実験所を開設する際、大口のスポンサーも現れた。場所は、マサチューセッツ州南部のベニキース島であった。モースは当然その講師であった。そのスローガンは『書物ではなく、自然に学べ』で、受講生の大半は高校や師範学校の教師であった。そこで学び、日本の生物学会に影響を与えた人物は、このなかに大勢いた。

ベニキース島でモースは、腕足類の研究に力をいれた。腕足類とはシャミセンガイやホウズキガイなどの仲間を指している。6億年も前の古生代の海で大繁盛をした、いまは落ち目の動物である。触手動物門に分類をされているが、軟体動物であるとか、他の動物群との系統がはっきりしていないので、動物学者の注目の的であった。腕足類の研究をすればするほど、ほかの動物群との類縁関係を探り続けて行くうちに、数々の事実遭遇して進化説を肯定せざるを得なくなった。しかしながら、彼の住むニューイングランド地方はプロテスタントの根強い土地であり、進化論支持を表明するには勇気があることであったと言われている。大衆の支持を得られず、飯の食い上げとなり、生活ができなくなる。でも、自分の説は曲げられないとおおっぴらに旗印を鮮明にした。最初のうちは、少数の支持しか得られなかったが、徐々に進化論の有力な推進者となっていった。

進化論者としての立場を明確にした以上、モースにはさらなる腕足類の類縁関係を調査しなければならない。しかしながら、アメリカの東海岸には腕足類の棲息が少なすぎる。6億年の間に、3万種程生存し続けていたが、現存するのは世界中で3百種弱に過ぎないとか。しかもその、多産地域は限られている。開港の前後から、欧米の水路調査船が多数出没してきていたが、日本近海には腕足類が多いという調査結果であった。一説によるとアメリカの東海岸には数種類しかいないのに、日本には30から40種類も棲息しているということであった。

モースは、これらの噂を確かめるべく、日本へ行く決心をした。1877年。その時、彼は39歳であった。

日本上陸、そして江の島へ

モースは、太平洋上の公開に1年半ほどかけて、横浜港に6月17日に到着した。そして、オープン後4年ほど経過したグランドホテルに入った。翌日早速横浜の街に出てみた。幕末の様子が残る異国の人々の生活を見て、大いに関心を持ったに違いない。19日にモースは、東海道本線に乗車して東京に向かった。途中、大森駅を出てすぐ、線路脇の切通しに白い貝殻が露出しているのを見たときに、これは貝塚であると確信をした。

東京では、東京大学教授の外山正一（とやままさかず・後に東京帝国大学総長、文部大臣等を歴任。新体詩運動でも名高い。）他が、出迎えていた。外山がモースを招聘したのかもしれない。当時竹橋にあった文部省に着いたとき、モースに東京大学の教授になるように言われた。もし応諾をするのならば、江の島に臨海実験所を開き、標本も集められだろう。

モースは日本人の生活ぶりを熱心に観察して、自然を生かした装飾品や簡素な民具、特に竹製品に心を奪われた。日本人が正直で、礼儀正しいこと、清潔なことも彼に強い印象を与えた。

彼は、東京大学の教授を月給370円で引き受けた。破格の高級である。当時の一般の日本人の給料は10円前後であったとされる。

モースは、7月17日から8月28日まで江の島に滞在、来日第一の目標である腕足類の収集・研究を行った。アガシー教授の門下生である矢田部良吉教授の案内でやってきた。

江の島を選んだのは、横浜から近く、外国人が自由に訪問できる「遊歩地域」であったからだ。東海道本線を横浜駅で下車、そこから人力車を利用した。実験施設とする小屋は島の入口のすぐ左側にあり、約6坪くらいの小さな小屋であった。宿泊場所は、岩本楼あるいは宿屋の立花屋に滞在をした。

磯採集を始めた。偶々、海が大荒れとなったり、大型台風が来たりしたが、約1月余の期間、大きな収穫があった。

狙いとする腕足類のシャミセンガイの新種を、数百個ドレッジ（引き網）で収穫があったときには、さぞかし感激をただらうといわれている。その他、アメリカにはない各種の貝類、環形動物等、船をチャーターして、探し求め続けた。また、漁師達から、ヒトデなどの棘皮動物を買ったり、片瀬川の河口ではシジミなどの貝類を採取したりした。

藤沢の上流地方ではカワニナを捕獲した。また、各種の植物をも採取した。そして、江の島を去る時の収穫品を詰め込んだ荷物はかなりの重さになった。

当時、東京の上野で内国勸業博覧会が開催されていたので、彼は一時帰国をするまで、少なくとも8回は観覧して、数々のスケッチを残している。出品されていた工芸品がことのほか気に入っていたようだ。

大森貝塚

貝塚が、古代人の遺跡と認められるようになったのは、まず、ヨーロッパで1850年頃であった。それに遅れてアメリカでも研究が始まった。モースも、1862年に『堆積物』の下から得た珍しいカタツムリと題する報告を行っている。多分、貝塚のことを指しているであろう。その彼が日本に来てからわずか2日で、車窓から一瞥しただけで、線路わきの崖にある貝殻の蓄積を見て、こ

れは貝塚であると、大森の貝塚を発見している。

でも、本格的な発掘は同年の9月からであった。京浜東北線の大森駅を過ぎて大井町方面に向かい600メートルほど進んだ左側のところにAとBと貝塚が存在する。線路に沿ったB貝塚からは縄文時代後期の加曾利B式土器が、また、線路から20から50メートル西側に離れたA貝塚からは、縄文時代晩期の安行3式土器が多く出土して、縄文早期、中期の土器が、数は少ないが出土している。

彼は、ともかく心配だったらしい。誰かに先を越されはしないかと、絶えず気にしていたと言う。親しい人だけ話して、他には誰にも打ち明けることなく、数か月間そこを訪れる機会を待っていた。彼以外のお雇い外国人のなかには、ドイツのナウマン教授等もいたから、余計に心配をした。更には、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの次男であるハインリッヒ・フォン・シーボルトも、自分が先に発見をしたと主張をしているが、確証はない。なにしろ、線路わきの目立つところに存在する貝塚を、それまで誰も発掘をしていなかったことが不思議なくらいである。先に、組織的に研究をして、学界に発表しなければ、正式には認められない。モースは、研究の成果である報告書・大森貝塚"Shell Mounds of Omori"を翌年出版している。この報告書の出版が日本の近代的考古学の幕を開いたと言えよう。

大森貝塚の出土品は東京大学に保管されて、国の重要文化財に指定されている。品川歴史館にも関連した展示がある。

モースの日本への寄与

- 各大学で発行している学術報告書「紀要」の最初となった。
- 大森貝塚よりの出土品の重複品がアメリカへ。代わりに多くの得難い標本、図書が日本へ。
- 大学付属の博物館が実現した。
- モースにより「日本その日その日・Japan Day by Day」（日記をまとめたもの）を出版した。貴重な明治初期の日本の事情が分かる。3,500ページにわたる。いかに、日本人は素朴な生活をしてたのか、細かいことまで。
さらに、多くのスケッチ画（777枚）を描いている。
- 当時の民俗資料が、アメリカに多数残されている。貴重なものも多い。

参考文献

モースその日その日 磯野 直秀 有隣堂

モースと日本 守屋毅 小学館

モースの発掘 椎名仙卓 恒和出版

Japan day by day

その他

